



フォトエッセイ『国境なき音楽紀行』

第2回 ザンジバル～風と海が伝える音楽、ターラブ～



日頃、音楽を通して人々と交流し、世界各地を旅することが多い。これら旅の印象と感動を、
フォトエッセイという形でほんの一部でも日本の皆さんにお届けできればと思う。 平井元喜



リスなどに統治され、かつては東西交易の中継点として香辛料、象牙、金、奴隸貿易などで栄えた。ターラブの音楽様式や楽器編成には、アフリカ、ペルシャ、ヨーロッパ、インド、インドネシアなどの文化が凝縮されている。

目をつむりターラブを聴くと、「風」の音、「海」の音が聞こえてくる。アジアからの貿易風とアフリカ大陸からの季節風がインド洋の航海を可能にし、ザンジバルに繁栄をもたらした。ダウ諸国音楽院の「ダウ」とは原始的な木造船を意味する。風と海は、太古の昔より文明や音楽、そして人々の喜びや哀しみを運んだのだろう。

この学校でさまざま民族楽器を弾いた。私の奏てる音に合わせ先生や生徒が踊りだし、自分たちの楽器を持ってきては即興で弾き始め、新たなジャムセッションが次々と生まれる。言葉は不要ない。笑顔とパッションだけだ。ターラブとは、アラビア語の「タリバ」(=興奮させる、感動させる)から派生した言葉だそうだ。全身が震え、生きた音楽に感動した。



漁村の老婆と幼子

ひらいもとき
ピアニスト、作曲家。73年東京生まれ。桐朋高校、慶應義塾大学文学部哲学科、英王立音楽院大学院卒。96年渡英。

これまでヨーロッパ、中東、アフリカ・米国・中南米・アジア各地を演奏旅行。米カーネギーホール、英ウェーブホール、蘭コンセルトヘボウ等でしばしばソライルを行う。2015年は、ラ・フォル・ジュルネ、紀尾井ホール等のほか、カリブ海、中南米、セネガル、英国、ノルウェー、イタリアなどで演奏する。音楽を通して平和・環境・医療・教育問題にも積極的に取り組む。3.11以降、被災地や欧米各地で復興支援コンサートを続ける。07年よりプロジェクト「日本の童話絵本を世界へ」(朗読・音楽・映像のコラボレーション)に芸術監督・演出家として参加。NHK文化センターや時事通信社トップセミナー等で講演。BBC、NHK、テレビ朝日("題名のない音楽会")などテレビ・ラジオ出演も多い。ロンドン在住。

平井元喜公式ウェブサイトにて旅の写真を公開中。もっと世界の風景を見てみたい! という方必見です。www.motoki-hirai.com



ヴァイオリンでターラブを弾くと別の楽器に聞こえてくる。西洋音楽の12音には微妙な音程が耳に心地よい



ザンジバルで唯一のグランドピアノ。象牙鍵盤のあちこちが剥がれていた。海から吹きぬける風は、私の音楽をどこへ運んでゆくのだろうか



ウードとヴァイオリンの即席トリオ。音楽院では、西洋の楽譜も使用し、クラシック音楽も少し教えていた



乐器は写真左から、ダルブルカ(アラブの太鼓)、ウード(リュートや琵琶の祖先)、ヴァイオリン、カヌーン(ツィターの祖先で9分の1音まで出せる)。地域により、タブラ(インドの太鼓)、チェロ、アコーディオン、木琴、笛、タショコ(日本の大正琴)を使うターラブの楽団もある。歌手は、スワヒリ語で唄う



ンゴマ(太鼓)で遊んでみる。すこぶる楽しい。太鼓が鳴るや、みな自然と踊り出す



タンザニアでは太鼓全般を「ンゴマ」と呼ぶ。また、東アフリカの伝統芸能で太鼓中心の踊り、歌、呪術、儀式のこと「ンゴマ」という



たたず
海藻を獲る海女。何んがミレーの『落穂拾い』を思わせる